

新型コロナウイルス流行下での施設入所する認知症患者の 家族介護者の介護に関する経験 —グラウンデッドセオリーアプローチを用いた国際共同研究

大阪医科薬科大学 看護学部

准教授 樋上 容子

(共同研究者)

大阪医科薬科大学 看護学部

助教 山内 彩香

ミネソタ州立大学マンケート校 (アメリカ) 看護学部

准教授 Kristen Abbott-Anderson

チューリッヒ大学 (スイス) 医学部

教授 Rahel Naef

チューリッヒ大学 (スイス) 医学部

研究員 Qendresa Thaqi

カンタベリークライストチャーチ大学 (イギリス) 医学部

講師 Pat Chung

香港中文大学 (中国) 看護学部

助教 Ken Ho

大阪医科薬科大学 看護学部

教授 鈴木 久美

はじめに

アルツハイマー病やそれに伴う認知症患者は、要介護状態となり自宅での生活が難しくなった場合には長期療養施設に入所している。長期療養施設に入所する認知症の人 (Person with Dementia, 以下PwD) の家族介護者および近親者は、PwDの幸福のために重要な役割を果たしている。

2020年春からの新型コロナウイルス (COVID-19) の世界的な流行に伴い、高齢者という脆弱な集団におけるウイルスの拡散を防ぐために、長期療養施設では家族介護者等の面会に対する厳格な制限やロックダウンが実施された (Tapper, 2020)。現代の医療や社会福祉において、PwDと家族介護者との連携は、認知症ケアにおける重要なパーソンセンタードな戦略の一つである。しかしながら、面会制限やロックダウンは、介護の三位一体 (ケア・トライアド: PwD・家族介護者・介護職者) から、家族介護者を積極的に除外した。その結果、感染対策としては有効であっても、長期療養施設に入所する高齢者やPwDにとっては、社会的孤立を悪化させ (Sit, et al, 2022)、心理社会的には負の結果を招いた (Ho, 2022)。このように、面会制限やロックダウンのPwDに対する影響は示されているが、PwDと簡単に会うことができなくなった家族介護者に及ぼす影響は明らかではない。

本研究の目的は、グローバルな視点から、COVID-19のパンデミック下で面会制限下におけるアメリカ、スイス、日本、イギリス、中国の長期療養施設に入所するアルツハイマー

型認知症の家族介護者の経験を調査し、PwD、家族、介護職者間の社会的相互作用と関与の過程について、深い理解と初期の理論化を行うことを目的とした。

方 法

研究デザイン：質的調査研究(半構造化面接法)

研究対象者：アメリカ合衆国(ミネソタ州マンケート)、イギリス(クライストチャーチ)、スイス(チューリッヒ)、中国(香港)、日本(大阪)の長期療養施設に、COVID-19のパンデミックより前に少なくとも6か月間入所するPwDの家族介護者を対象とした。

調査方法：COVID-19のパンデミック下に長期療養施設に入所するPwDの家族介護者の経験について半構造化インタビュー(対面・オンライン)により収集した。

分析方法：構成的グラウンデッドセオリーアプローチ(Charmaz, 2014)を用いた。これは、社会的プロセスとこれらの相互作用に割り当てられた意味を探求するためであった。個人とチームによるコーディング、メモ書き、カテゴリー生成などが含まれた。インタビューを逐語化した生データはその国で話されている主要言語(英語、ドイツ語、中国語、日本語)で表示したが、コード以降は英語で表示した。

本研究は、主幹校であるミネソタ州立大学研究倫理委員会及び大阪医科薬科大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結 果

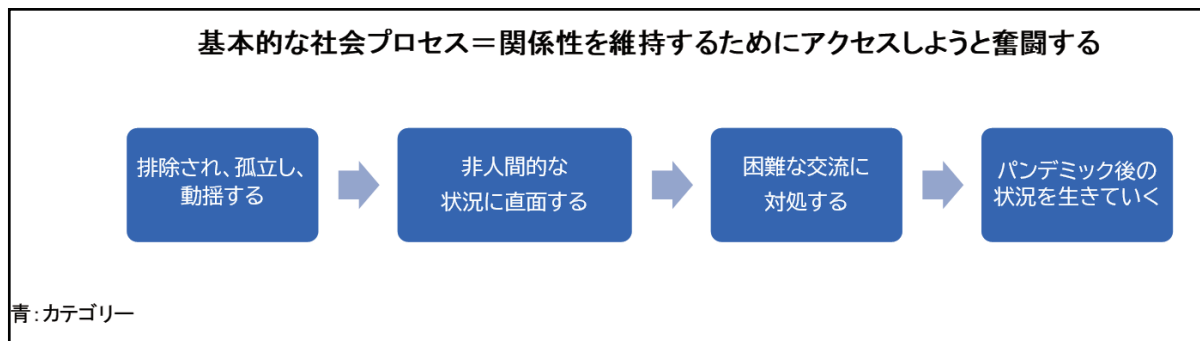
全収集データを統合し最終的な理論構築中であるが、現在統合を終えたアメリカ、スイス、日本の結果を以下の通りに報告する。

対象者である家族介護者12名の平均年齢は65.9歳±9.6歳、女性9名、PwDとの関係は、配偶者5名、子供6名、その他1名であった。

面会制限やロックダウンのため、家族介護者は、これまで頻繁に訪れていた長期療養施設から排除され、孤立感を感じ動揺し、無力感を目の当たりにした。現在の予備分析により、メインピックである「関係性を維持するためにアクセスしようと奮闘する」の下位テーマとして、(1) 排除され、孤立し、動揺する、(2) 非人間的な状況に直面する、(3) 困難な交流に対処する、(4) パンデミック後の状況を生きていく、の4つのカテゴリーが明らかになった。図1に、予備分析の各カテゴリーを示した。

基本的な社会的プロセスは、家族介護者がCOVID-19のパンデミック下で、PwDや介護職者とのコミュニケーションや社会的な相互作用を維持しようとする姿を捉えた。家族介護者は、突然の面会禁止により他の交流の機会も提示されないまま、異論を唱えられない事態の中で、試行錯誤し関係性を維持し、PwDと定期的に交流し、できる限りのPwDへのケアを継続するために可能な限りのことをしていた。

図1. COVID-19のパンデミック下に長期療養施設に入所する認知症者の家族介護者の経験
(予備分析)



(1) 『排除され、孤立し、動揺する』のカテゴリーでは、家族介護者が排除された経験とその影響を捉えた。何が起きているのかわからないまま放置される経験をし、これは非常に耐え難いことで、苦痛、怒り、悲しみを引き起こした。家族介護者は、PwDを心配し、無力感を抱えた。その苦痛や無力感に対するサポートは必ずしも得られていなかった。

～2020年の面会ができなくなったのが5か月ほど。あとは窓越し面会が月に1度ぐらいあったのが2か月ほど続いて。

～(モニターの前で) ほんと写真だけを見て話しているような感じでした、私としたら。そういうのは寂しい気がします。

～こんな面会(オンライン面会)だったら、こっちで叫んでるだけで、私がね。叫んでるだけで、ちょっとかなり。面会もそういう形で取られたら、きつかったですね。

(2) 『非人間的な状況に直面する』のカテゴリーでは、長期療養施設の介護職者のケアの質やPwDの健康状態、また実施された人間味の無いコミュニケーションによるネガティブな経験が含まれた。PwDの苦痛を目の当たりにすることは辛い経験であった。家族介護者は、必要不可欠な介護のパートナーとしての家族介護者の存在を認識されず、疎外感を感じた。

～(面会制限後) 実は会ったとき、あまりにも痩せてるので「今、一体、何キロなんですか」って聞いたら、その聞いたことに対して(スタッフの)返事が、何ていうかな、すごいあやふやだったんです。・・・ちょっとびっくりしたんですけど。

～お互いに慣れていないっていう状況の中で、何かな。・・・もうちょっと手探りでいいので、ああしましょうか、こうしましょうかみたいな相談を。相談がなかった。

(3) 『困難な交流に対処する』のカテゴリーでは、家族介護者が面会制限の中で、何とかしてPwDと繋がりたい、触れたい、会いたいと試行錯誤した経験が含まれた。そのような中で、介護職者へのこれまでのPwDへの介護やパンデミック下で職務を担う事への感謝からくる信頼感と、PwDの状態変化に伴う介護職者への不信感と、アンビバレンツな感情を経験した。

～心配してたことが悪い事実となって、いろいろと上がってくることについて、一体、何

なんだろうというふうには思いました。

～面会に行くときに、やっぱりあなた (PwD) が必要なんですっていう、それをどのようにしたら伝えられるだろうかっていうこと。そんなんで花を準備したりするのも、そんなようなことが伝わるかなっていう、そんな思いもあるんです。

～安心感というか信頼関係を築けていたんじゃないかなと思うんです、施設の人とも。

(4) 『パンデミック後の状況を生きていく』のカテゴリーは、これまでの介護の経験やパンデミック下での経験から、将来を見据えた認知が含まれた。

～もう慣れました。世の中がこういう状態なのかなというふうに、私が自分で理解するというんですか。

～家族 (同士) のコミュニケーション取るのが一番大事やな。一人で悩んでらっしゃる方も、結構いらっしゃいますので。こういうときはどうしたらいいかなというのを。

考 察

本研究は、COVID-19のパンデミック時に長期療養施設に入所するPwDの家族介護者の様々な経験を明らかにした。得られた結果は、家族介護者が、PwDを守るために異論を唱えられない事態を受容することを求められ、その耐え難い苦痛へのサポートが必ずしも得られていない中で奮闘した様子が示された。これらのことから、PwDの家族看護において、PwD・家族介護者・介護職者の関係性の維持が果たす重要な役割を示したと考えられる。特に、今後、同じような異常事態が発生した際には、PwDや家族介護者により優しい方法で公衆衛生対策が実施され、一律の面会制限やロックダウンといった家族介護者を排除する方向の政策ではなく、介護の三位一体 (ケア・トライアド：PwD・家族介護者・介護職者) の関係性の維持を目指す施策に変更される必要があることが考えられた。

要 約

本研究では、国際共同のグローバルな視点から、COVID-19のパンデミック下で面会制限下において長期療養施設に入所するアルツハイマー型認知症患者の家族介護者の経験を調査した。その結果、家族介護者は、面会制限やロックダウンのため、それまで頻繁に訪れていた長期療養施設から排除され、孤立感を感じ動揺し、絶望と無力感を目の当たりにした。そのような中で、現在のパンデミック後に至るまで、「関係性を維持するためにアクセスしようと奮闘」していた。(1) 排除され、孤立し、動揺する、(2) 非人間的な状況に直面する、(3) 困難な交流に対処する、(4) パンデミック後の状況を生きていく、の4つのカテゴリーが含まれた。得られた結果は、PwDの家族看護において、PwD・家族介護者・介護職者の関係性の維持が果たす重要な役割を示したと考えられる。

本研究結果は、2023年アイルランドで開催される第16回国際家族看護学会学術集会で発表予定である。また、国際学術雑誌への投稿に向け最終的な分析作業中である。

文 献

1. Tapper, J. Calls to lift lockdown in UK care homes over fears for residents' mental health. The Guardian, Social Care. 2020 May 30. <https://www.theguardian.com/society/2020/may/30/calls-to-lift-lockdown-in-uk-care-homes-over-fears-for-residents-mental-health>
2. Sit, R. W.-S., Lai, H. H., Dong, D., Wang, B., Wong, M. C., Chung, R. Y., & Wong, S. Y.-S. Explaining the Psychosocial Effects of COVID-19 Among Older Hong Kong Chinese People-A Qualitative Analysis. *Journal of Geriatric Psychiatry*, 35 (2) , 206-214, 2022.
3. Ho, K. H. M., Mak, A. K. P., Chung, R. W. M., Leung, D. Y. L., Chiang, V. C. L., & Cheung, D. S. K. Implications of COVID-19 on the loneliness of older adults in residential care homes. *Qualitative Health Research*, 32 (2) , 279-290, 2022. <https://doi.org/10.1177/10497323211050910>